

平成 27 年度障害者スポーツ振興事業
障害者スポーツ理解促進フェスティバル
障害者スポーツ普及・啓発事業（鹿児島会場）
「パラスポ 2016 in かがしま」

実施日 平成 28 年 1 月 30 日（土）

場所 ハートピアかごしま 鹿児島市小野 1-1-1

報告者 前田 究（鹿児島県障害者スポーツ普及・啓発事業実行委員会）

公益財団法人日本障がい者スポーツ協会が主催する障害者スポーツ理解促進フェスティバル「パラスポ 2016 in かがしま」が、平成 28 年 1 月 30 日、ハートピアかごしまで開かれました。



ハートピアかごしま

この事業は、地域住民やスポーツ関係者、教員といった障がい者スポーツに日頃かかわりの少ない人を対象に、体験等を通して障がいや障がい者スポーツへの理解を深めることが目的。文部科学省の委託を受け、同協会と開催県の諸団体が連携し、全国 8 か所で実施するものです。2020 年に全国障害者スポーツ大会開催を控える本県が打診を受け、九州地区のさきがけとして開催することになりました。実施にあたっては主催・共催・協力団体で実行委員会を立ち上げ、企画・運営を担当する体制で臨みました。

プログラムは午前中に講習会、午後からは体験会。体験できる種目は、全国障害者スポーツ大会実施種目と実施予定種目を 5 競技準備しました。

午前 9 時 50 分、多目的ホールでのオープニングセレモニーで「パラスポ 2016 in かがしま」は幕を開けました。



日本障がい者スポーツ協会山田常務の挨拶

午前中は「知的・発達障がいの理解とユニバーサルスポーツ」という演題で、講師は筑波大学附属大塚特別支援学校の阿部崇教諭。教員や障がい者スポーツ指導員を中心に 58 名が受講しました。

前半は知的・発達障がいの概論に加え、阿部先生の勤務先での指導の様子を動画で紹介されました。楽しい遊びの中にトレーニングの要素が組み込まれ、興味深く、新鮮味溢れる内容でした。終盤には新聞紙を使った軽運動の実技があり、工夫とバリエーションの豊富さに驚かされました。動画でも紹介された風船ゴルフで講習会は終了。受講した教員からは「すぐに授業で使いたい」という声が聞かれるなど、解りやすく、指導の参考になった講習会でした。



58 名が受講した講習会



新聞紙で作った棒を使ったエクササイズ



棒を倒さず隣へ移動



新聞紙ゴルフで“打ちっぱなし”を体験

午後からは、全国障害者スポーツ大会実施種目である車椅子&知的障がいバスケットボール、陸上競技の種目で旗門を通過しタイムを競うスラローム、音を頼りにボールを打ち合う視覚障がい者向け卓球のサウンドテーブルテニス、フライングディスク、今後導入が検討されているボッチャを準備し、来場者を待ちました。

目玉であるバスケットボールは、参加した小学生に大人気でした。テレビでしか見たことがないバスケットボール用車椅子に乗り、パス、ドリブル、シュートに挑戦。見た目以上に難しい動作を体験し、競技に対する理解が深まりました。「薩摩ぼっけもん」や「ナフティー」という本県の子車椅子バスケットボールチームが中心となりブースを企画・運営。知的障がい者バスケットボールチーム「鹿児島バルダーズ」はパス出しなど体験を手伝うほか、ポスター展示で全国障害者スポーツ大会を目指す活動を紹介してくれました。



パス、ドリブル、シュートといったバスケットボールの一連の動きを体験
バスケットボール同様、車いすを使用するスラロームは、ミニコースを2種類（初心者用と上級者用）準備し、それぞれのコースでタイムトライアルを実施。一般男女、小学生以下男女の4部門の最高タイムを更新されるごとにホワイトボードに掲示しました。参加者は挑戦するたび習熟度が上がりタイムが良くなるので、繰り返し挑戦する人が後を絶ちませんでした。イメージしたライン取りを車いすで行う難しさといった競技の魅力が伝わったようです。



自己記録更新を目指しリピーター続出のスラローム

同じく体育館で実施したボッチャでは、参加者同志の模擬試合で盛り上がりました。緻密な投球技術と作戦が必要なボッチャは、予想以上に難しく面白いことを体験できただけでなく、傾斜台（ランプ）を展示するなど、重度障がいがあってもプレーできることを知っていただくことができました。



ボッチャは重度障がいでもスポーツができることをアピール

サウンドテーブルテニスは、全国障害者スポーツ大会出場経験のある3名の視覚障がい選手が、参加者の挑戦を受けました。参加者は実際にアイマスクを装着し、音を頼りにプレー。しかしながら、ボールの転がる方向や速さを聞き分け、ラケットにボールを当てることは至難の業で、ラリーはなかなか続きません。普段トレーニングされている選手が何食わぬ顔で返球される様子に驚きを感じるとともに、障がい者スポーツの広がりや奥深さを体感してもらうことができました。



サウンドテーブルテニスは実際にアイマスクをして現役選手に挑戦

障がい者スポーツのエントリー種目としては最適で、本県でも年々参加者を増やしているフライングディスクは、スペースの都合もあり、ゴールにディスクを通すアキュラシーのみ実施しました。全国障害者スポーツ大会の標準となる5メートルからゴールを狙うだけでなく、参加者にレベルに合わせて近い場所からの挑戦や、公式大会にはない「ディスクゲッター」という的抜きゲームも実施。誰でも手軽に始められるこの競技の魅力が伝わりました。

体験と同時に障がい者スポーツの競技シーンや解説のパネル展示を実施。併せて陸上やテニス用の車いすや競技用義足も触れてもらいました。参加者には障害者スポーツに関するクイズを解きながら展示を見てもらい、解説担当がヒントを出すという仕掛けが功を奏し、こちらの会場も賑やかでした。



フライングディスクはアキュラシーやディスゲッターを体験



パネルで学びクイズに答え、解らないことは解説担当がアドバイス



各種競技用車いすやスポーツ義足も展示

各体験ブースでスタンプをもらいクイズに全問回答した参加者には「パラスポマスター認定書」とともにオリジナルクリアファイルと障がい者スポーツ情報の冊子が手渡され、満足気に会場を後にしました。



認定書や障がい者スポーツ情報冊子をファイルに入れて進呈講習会を含めた参加者は約 200 名。実行委員を含めたスタッフは 104 名（内、障がい者スポーツ指導員 55 名）に達しました。障がい者スポーツの魅力が伝わり、2020 年の「全国障害者スポーツ大会かごしま大会」を知らしめる第一歩のイベントとなりました。



講習会受講後に体験ブースを担当するスポーツ指導員の打合せ



イベントポスターは体験ブースを全面に出したデザイン



スタッフはポロシャツを揃えて一体感を演出